

武蔵野日曜集会

悦びの霊

――ヨハネ伝第16章――

1968年5月26日

小池辰雄

最初の殉教者ステパノ『内村鑑三の根本問題』の書評 霊的人格と化せられつつあるか 然りか否かを迫られる 生命的霊的真理 憂いは喜悦に 宇宙的なキリスト 信即現 勝利的な戦闘 自然性と霊

【ヨハネ16】

1 我これらの事を語りたるは、汝らの蹟かざらん為なり。2 人なんじらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事うと思ふとき来らん。3 これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。4 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言いしことを汝らの思いいでん為なり。初より此等のことを言わざりしは、我なんじらと偕に在りし故なり。5 今われを遣し給いし者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何処にゆく」と問う者なし。6 唯これらの事を語りしによりて、憂なんじらの心にみてり。7 されど、われ実を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主なんじらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。8 かれ来らんとき世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。9 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。10 義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてなり。11 審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。12 我なお汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんじら得耐えず。13 然れど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。14 彼はわが栄光を顕さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。15 すべて父の有ち給うものは我がものなり、此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云えるなり。16 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし。17 爰に弟子たちのうち或者たがいに言う『「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と言い、かつ「父に往くによりて」と言い給えるは、如何なることぞ』18 復言う『この暫くとは如何なることぞ、我等その言い給うところを知らず』19 イエスその問わんと思えるを知りて言



い給う『なんじら「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言いしを尋ねあうか。』²⁰ 誠にまことに汝らに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂うべし、然れどその憂は喜悅よろこびとならん。²¹ おんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生まれたる喜悅よろこびによりてなり。²² 斯く汝らも今は憂あり、然れど我ふたび汝らを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、その喜悅よろこびを奪う者なし。²³ かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜うべし。²⁴ なんじら今までは何を我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悅よろこびみたさるべし。

²⁵ 我これらの事を譬たとえにて語りたりしが、また譬たとえにて語らず、明白あらわに父のことを汝らに告ぐるとき来らん。²⁶ その日には汝等わが名によりて求めん。我は汝らの為に父に請うと言わず、²⁷ 父みずから汝らを愛し給えばなり。これ汝等われを愛し、また我の父より出で来りしことを信じたるに因る。²⁸ われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり。』²⁹ 弟子たち言う『視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいい給わず。³⁰ 我ら今なんじの知り給わぬ所なく、また人の汝に問うを待ち給わぬことを知る。之によりて汝の神より出でたり給いしことを信ず。』³¹ イエス答え給う『なんじら今、信ずるか。³² 視よ、なんじら散らされて各自おのが処ところにゆき、我をひとり遺すとき到らん、否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕いに在すなり。³³ 此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。なんじら世にありては患難なやみあり、然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。』

●最初の殉教者ステパノ

¹ 我これらの事を語りたるは、汝らの蹟かざらん為なり。² 人なんじらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事うと思ふとき来らん。非常にキリストの予見は厳しいものがある。やがて地上を去ろうというイエスです。それで、弟子たちもみんな去つてしまふ。

「お前たちも去らんとするか」

という言葉がありますが。キリスト・イエスほど絶対の孤独を味わった人はない。そのことはよく見えていた。一番弟子であるペテロでもイエスを三度拒むというようなことになる。そのことも予見しておられた。けれども、キリストはもうひとつどん底の愛をもつて顧みておられる。キリストのどんな激しい言葉もみな、どん底は愛から発している。それで、

「やがて、お前たちを本当に集めるぞ。もうそうなったら、私から離れるわけには



いかなぞ」

と。そういうもうひとつ先のことを見ている。なんとこれ以上の深刻なドラマはない。またこれ以上の輝かしい先を見ているドラマもないわけです。

「^{おもんば}慮^わつて、お前たちが躓かないように、私はこれらのことを言っておくんだがね」

と。前の26節に、

「²⁶父の許^{もと}より我が遣^{つか}さんとする助^{たすけ}主^{ぬし}、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証^{あかし}せん。」(ヨハネ15・26)

「その御霊によつて本当に私の私たることが今にわかるぞ」

ということを言われた。しかし、これからはみんなに除名される。いわゆるユダヤ人の集会から除^のけ者にされて、アウトサイダーにされるといことです。そればかりでなくて、

然^{しか}のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事^{つか}うと思ふとき来らん。

と。これを真つ先にやったのが誰であろう、パウロである。パウロはステパノを殺した張本人の一人です。最初の殉教者ステパノ。使徒行伝第6章のところを開きましょう。3節に、

「³然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞^{よめい}ある者七人を見出せ、それに此の事を掌^{つかさ}どらせん。⁴我らは専^{もっぱ}ら祈^{いのり}をなすことと御言^{つか}に事^{つか}うることを務めん」⁵集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊と

に満ちたるステパノ

一番先にステパノの名が書いてある。

及びピリポ、

ピリポの伝道も有名な伝道ですが。

プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、⁶使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按^おけり。

……⁸さてステパノは恩恵^{めぐみ}と能力^{ちから}とにて満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行えり。……ステパノと論ぜしが、¹⁰その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。……

という凄い男です。6章の終りの方に、

¹⁵ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使^{みつかい}の顔の如くなりき。」(使徒行伝6・3～15)

と。そして、7章でもつて滔^と々たる演説を始めまして――ステパノの演説は凄いですよ――

―旧約聖書をグーッとやつてしまつて、そして51節、

「⁵¹項^{うなじ}強くして心と耳とに割礼なき者よ、

今のキリスト教会が大体これです。

汝らは常に聖霊に逆らう、

「神の言、言」なんて言つたつて、神の言がいかにかに霊言であることを知らないで、聖霊に逆



らっているようなクリスチャンが非常に多いわけです。まあ逆らわないまでも、とんとこれを知らない。

その先祖等のごとく汝らも然り。⁵² 汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。

みんな迫害をしたじゃないかと。

彼らは義人の来るを預^{きた}め告^{あらか}げし者を殺し、

「義人」とはキリストのこと。

汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。⁵³ なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』⁵⁴ 人々これらの言を聞きて心、怒りに満ち切^{はがみ}齒しつゝステパノに向かう。⁵⁵ ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、⁵⁶ 『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』⁵⁷ ここに彼ら大声に叫びつつ耳を掩^{おお}い心を一つにして駆け寄り、

とうとう彼らは石打ちにしてしまった。

⁵⁸ ステパノを町より逐^おいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置き。⁵⁹ 斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』⁶⁰ また跪^{ひざま}つきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就けり。』(使徒行伝 7・51〜60)

この54節から60節のステパノの最後のところは実に素晴らしい。これが最初の殉教者ステパノです。これを打った者の一人のパウロが、実は自分たちが本当に神に仕えていると思つて、こういうひどいことをした。

その後、プロテスタントとカトリックの宗教戦争が絶えない。また、正統派の信仰と自称する者たちが実は本当の正統を異端として、これを迫害し拷問しというような歴史がある。こないだから大学でやっているウィクリフ(ジョン・ウィクリフ 1324.1330頃〜1384)とか、サヴォラローナ(ジローモ・サヴォラローナ 1452〜1498)とか、ヨハネス・フス(1369〜1415頃)というこの三人は、宗教改革以前の三人の殉教者です。そういうような、

「俺たちこそが義^{ただ}しい」

と思つているパリサイが、実は本当の神の福音の底流を行く人たちを迫害する歴史が絶えない。このごろはだいたいぶよくなりました。カトリックとプロテスタントがだいたい近づいてきて、そういう争いはいかと。昔のような迫害はなくなってきたようです。けれども、ただ人間的な妥協ではなくして——その形態はどれでもよろしい、在り方はカトリックでもプロテスタントでもよろしい——大事なことは、

「本当にキリストの霊が生きているか」



という、この一点にかかるんです。そういうところに最終的に来なくてはならないわけです。私も別に迫害ということはいいですけども、とにかく、無教会からアウトサイダーにされた。正直、非常に不愉快な事態が起きたわけですが、まことに彼らはお気の毒というだけの話です。

「汝らを殺す者みな自ら神に事つかうと思うとき来らん」

と。自分たちこそは神に仕えていると思う者が迫害する。

「お前たちを殺す者が、我こそは神に仕えていると思うときが来るだろう」

と。世の末までキリストのこの預言が当たっているわけです。

●『内村鑑三の根本問題』の書評

『内村鑑三の根本問題』という本を山本泰次郎という――教文館から『内村鑑三著作集』『書簡集』『信仰著作集』の三通りのものを出して、内村全集を結局出したその編集長が山本泰次郎という人ですが――その人が書いた本。その人が書評を書いてくれと頼まれたので私は書いた。今度のキリスト新聞に載っておりますから、それをお読みくだされば結構なんです。それを皆さんにご紹介しておきたい。

「こういう種類の書物の書評にはある難しさがある。それはある著者がある人物のこゝとを論じているのを、ある筆者が

この場合は私ですけれども。

論評するとなると、二重三重の複雑な構造がそこに出てくるからである。しかも、内村鑑三といった重厚多面な偉大な人物を論じた本を五、六枚の原稿用紙の中で論評することは不可能にちかい。それで私は本書の主な項目の主題を重点的に検証し、ごく簡単に所感を述べたい。まず本書の本論は内村鑑三先生（以下敬称省略）を四つの主題、即ち科学、非戦論、無教会主義そして十字架の福音をとらえて論じたものであるが、その他に著者が特に内村から学んだこととして、有島武郎事件と関東大震災とアメリカの排日移民法事件の三つを取り上げている。著者自身の言葉によればこの四つの題目にできるだけ有機的な繋がりを持たせ、全体を通じて内村の精神と信仰を明らかにすることがねらいである。そしてそれが同時に著者自身の信仰の告白であるということである。

第一の「内村鑑三と科学」において内村の信仰の特性を明かにしようというのである。著者は内村の生い立ちの環境が高崎城下の川守で鮮魚に親しめるものであったから、内村が魚類学を専攻するきっかけを与えられたことを示すとともに、内村が天性、自然に興味を感じる魂であったが、その興味の感じ方が根本的に科学的実験的実証的なものであったと同時に、人間味や宗教性ないし詩人的なものをもち有機的にそなえていた消息をいろいろな例証をもっておもしろく描いている。しかし多面、科学と宗教、



進化論と聖書の問題に内村がいかに苦しんだか、

昔はそういうことがあったわけです。

そこには未だ素朴な考え方があるにせよ、彼の信仰が神学や教義の上に立たず、事実と実験の上に立つ信仰であったことを著者が指摘していることは極めて正しい認識と思われる。「僕は自分で経験し実験しないことは語らない。君たちは目や耳から入ったことをすぐしゃべるからだめだ」といった内村の言葉は、一般のキリスト教界が今もなお銘記しておくべき言葉であると思う。ただ、実証の性格が宗教と科学では違つが、そういう分析に立ち入ってはいない。

まあこの本ではね。

また、科学的探求の無前提性に内村の自由独立の精神が養われたと著者が見ているのも十分うなずける。内村が小説や芝居を嫌ったのも、虚構的な空想的なものよりも、彼が事実や歴史を尊んだ精神からきていることは、あとの有島武郎事件のところ著者が触れている。ただ小説や劇が事実や体験を土台として告白するひとつの表現様式であることを内村が知らないわけではないが、

まあこれは私の判断ですが。

そこにまた内村の性格的特質があったとみなければなるまい。

とにかくそういったものは内村先生はだめなんだな。

内村にとっては文学は詩においてのみ肯定されていたようである。といっても、心や魂の告白としての直接性的真剣なものであつて、遊戯的な技巧的なものはもちろん彼の嫌ったものである。

第二の「内村鑑三と非戦論」においても、著者は自ら実証的に論を進めている。内村はむしろ長い間、可戦論者であつた。

正義のために戦つていいと。日清戦争は肯定していたから。

日清戦争終結後、彼は非戦論者となつた。その動機は著者がかかっている「寡婦の除夜」「寡婦の除夜」という内村先生の詩があるんです。この戦争で夫を亡くした人のその心境を歌った詩がある。

なる内村の詩がもっともよく深くこれを語っている。それはまさに人道的な道念から発したものである。そして彼は日露戦争を迎える頃、非戦論者として世と戦つた。私は著者の内村の非戦論に内在する悲哀と矛盾を読みながら、シュバイツァーが生への畏敬の悲願に満ちた悲哀と矛盾を思わざるをえなかつた。この両者には共通の強い戦いと深い悲哀があつたと思われるからである。

第三の「内村鑑三と無教会主義」。この論説において著者は一般に受けとられた一般にその中にいると自認している無教会および無教会主義者に「いわゆる」をつけるか、あるいは括弧をつけて著者自身の無教会ないし無教会主義と区別を付けている。



これはこの人が一般の無教会と違うものですから。

それは内村鑑三はいわゆる無教会主義者ではなかったということを論するためであり、同時に著者自らの立場を明かにするためである。その内容は私がここで簡単に紹介などできるものでないから、読者自らじっくり読んで判断すべきことがらである。私自身は著者とは別な信仰問題でその限りでは無教会と袂を別たしめられた苦杯を飲んでいるが（拙著『愛新書第3号』所載「無教会神学論」参照）、著者の立場は十分理解できるし、内村鑑三の無教会精神は著者の告白される通りと思う。

それからここから先がちょっと大事ですが。

福音は元来、いかなる主義主張によっても限定されるべきものではない。だから、歴史的必然において内村が主義をかざざるを得なかったとするも、福音を主義に固定化する傾向に対しては内村が否と言わざるを得なかったならば、それは正しいことであつたにちがいない。およそ精神的真理というものは矛盾弁証法的な構造を持つものであるから、概念的硬化現象は常に新たに乗り越えられていかなければならない。そこでこそ、イズム、主義というものの歴史的な意味と役割があろう。

第四の「内村鑑三と十字架の福音」。自他に対する内戦外戦の人

内村先生はなかなか癖のある人ですから、自分とも戦わなければならなかった。

個性の強烈な人間内村にとってキリストの十字架、贖罪の十字架こそは彼の存在の支柱であつた。このことは無教会主義論争の敵味方の等しく認める共通点、要であるにちがいない。まさに内村にとってキリスト教（クリスティアニティ）は十字架教（クルシフィックスアニティ）であるとの宣言の通りであつた。

言葉がちょっと似ているわけですが。これは内村先生自身がそういうものを短文の英文で書いているものがある。

だからといって、内村を十字架に限定しつぱなしにしたら、これまた観念化となつてしまつて、あの偉大な幅を持った内村が死んでしまつのではないか。この点で著者が十字架による罪からの自由と

実はこの人はこの本ではこの十字架しか言っていないですよ。

裏腹になつている聖霊の力によるキリストの復活の生命の自由、愛へと働く自由が内村のうちに自由に働きつつあつたことをもつと論証してほしかった。

「もつと」といっても、実はしていないんです。少しやんわり書いた。

私に言わせてもらえば、内村はそこに生きそれを時折語りつつも、

それは実際語っていらつしやいます。

なお使徒的次元と現実にまで積極的に迫らんとあえてしなかったようである。そこに内村の限界があると思われる。しかし、内村は既にそれを予感して、日本人による宗教の大革命の起こらんことを待望していた。これはまさにこれからのキリスト者各人

において自ら体現すべき課題である。

以上をもつて四つの主題を瞥見し所感を述べたが、本書は内村論のうちで独自の地歩を占めるものとして注目されるべき書である。終りに次の一句を引用したい。「誰か知らん、日本国の真の隆起は彼が非境の極に達したのちにあることを。」

もう内村先生は日本がだめになることを予感しておられたからね。

多くの人類学者によってイスラエルの血を交えたる民なりと称せられる

まあそれはどこまで本当だかは知りませんが。

大和日本人の世界的勢力もまたこの第一等国たる地位を投げうつてのちのことであると思う。」

これは内村先生の言葉です。

著者がこの句を引用した悲願に同感しつつ、内村鑑三の熱き祈りを思う。」

これが私の書評です。実は書評を通して私のまた立場というものはつきりあの方に出したわけですが。私たちが今、進ましめられているところは歴史的に非常に大事なところに置かれております。存在としては武蔵野幕屋なんてのは芥子種のようなものですけれども、しかし、どうぞ皆さんはその芥子種の、実は驚くべき原始力というものを自覚していただきたいと思っています。

●霊的人格と化せられつつあるか

³ これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。

「神と自分を知らないから、自分たちは神に仕えると思ったパリサイ人たちがお前たちを迫害して殺すようなことになるぞ」

と。この「お前たち」に限らず、歴史があとまでこのことをやっている。

⁴ 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言いしことを汝らの思いいでん為なり。初より此等のことを言わざりしは、我なんじらと偕に在りし故なり。

時機があるからね。いよいよ時機が満ちたから私は言うんだと。

⁵ 今われを遣し給いし者にゆく、

自分はいよいよ十字架を通つて向こう側にゆくと。

然るに汝らの中、たれも我に「何処にゆく」と問う者なし。

「クオバデイス・ドミニ」と問う者なし。

⁶ 唯これらの事を語りしによりて、憂なんじらの心にみてり。

なにかあつち側に行つてしまうというので、どうなさるんですかと、ただ心配している。

⁷ されど、われ実を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。

「私がお前たちから去ることが、これが本当にお前たちのためになる。地上ではど



んなに一緒にご飯を食べ、どんなに一緒に部屋の寝ようがダメだ。どうしても、お前たちの中に私は入らなくてはダメだ。入ったら、本当にもう別つことのできない世界になる。内住的な一つの世界。私は父の懐に入ってしまったているから。そのことが今度は、私はお前たちの懐に入る。また、お前たちは私の懐に入ってくれなければ、本当の世界は開示してこない。信仰なんて言って、ただ仰いदै たってダメだ。信じ交わる世界に入らなくてはいいかん」

と、まあこういうわけですよ、我々の言葉でいえば、だから、「去るは益なり」という。

我さらずば助主^{たすけぬし}なんじらに來^{きた}らじ、

この「助け主」が同時にキリストであるわけです。霊なるキリストが即ち聖霊であるわけです。天界のキリストが本当に無限に一人びとりに――百万人いれば百万分の一人入るのではない。百万人の人に一人びとりに――全一体としてキリストは、聖霊のキリストが、キリストの御霊が入ってくる。これが「助け主」です。助け主といったって、これは「救い主」といったっていいわけです。ただ助けるどころのさわぎではない。本当にこれがなければどうにもならないということ。

クリスチャンの信仰がそうですよ。「信仰、信仰」といくらやったって、聖霊がくるまでは本当のところに来ていないんだから、しょうがない。これはもう、魂の世界ははつきりしている。ごまかしがきかんです、根底的に。人間のキャラクターというものはなかなか変わりませんよ。

「性格は決して変わらない」

という言葉があるとおり。お互いさま、なかなか癖なんでもものは治らない。けれどもその奥に、それでもかかわらずという、乗り越えてそれを支配するところの霊があるかどうか。そういった新しい本当の霊的人格と化せられつつあるかどうか。

「霊的人格」ということは非常に私は大事な言葉だと思っています。あまり他の人が使いませんけれども。ただ「人格」ということは倫理学者でも哲学者でも言いますよ。けれども、霊的人格というものが――この霊は聖霊ですから――これになるまでは、本当に救われたという確信が出てこない。

「聖霊が来なかったならば、どうしてもダメなんだ」

ということキリストが言っている。聖霊のバプテスマを受けるまでは――わるくはないけれども、それは間違っているとは言わないけれども――本当の世界ではありませんよと。ウソとは言わないけれども、本当の世界ではないと。

●然りか否かを迫られる

だから、

「もう私はこのへんで向こう側に行って、あなた方の中に本当に入ろう」



と。これがキリストの悲願本願であるわけです。

我ゆかば之を汝らに遣さん。⁸ かれ来るとき

「かれ」と言つて、もちろん霊的人格としての聖霊を語っているわけです。

世をして罪につき、義につき、審判^{さばき}につきて、過^{あやま}てるを認めしめん。⁹ 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。

はつきりしている。不信が罪である。キリストを受けとらないことが罪である。人間のいわゆる「この罪、あの過^{あやま}ち」なんてのは枝葉にすぎない。キリストを受けとるか、受けとらないか。全的にキリストを受けとるかどうか。

「受けとる」というのは全的に受けとることを、「受けとる」という。それをしないのが罪。キリストに対して「然^{しか}り」と言うか、「否^{いな}」と言うかのどちらかなので、どうでもいいなんでもものはない。然りか否かを本当に迫られるところの事態です。だから、

罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。

「父にゆく」ということは、死に勝つて霊界に君臨することが「義」なんです。復活、昇天、即ち神の勝利です。この場合の「義」というのはそういう非常に盛んな言葉です。

「汝らの義とせられんために甦りたまえり」

という言葉パウロが言っています。罪からの解放がありましても、それではまだ本当の義はこない。罪からの解放というのはマイナスが消えただけのなしで、本当のプラスは復活のキリストを御霊、聖霊の事態において受けとるときに本当のプラスになるんだから。プラスの自由にならなくてはいけない。ただマイナスが消えたゼロの自由くらいでは。

「無即無限」というのは、このゼロ（無、十字架）とプラス（無限、聖霊）は実は離すことができないわけです。ところが、これをしょっちゅう離している。「十字架、十字架」とやっている。今の無教会もそうなんだ。十字架でお終いになっている。聖霊は光の世界からくる。

「太初^{はじめ}に言^{ことば}あり、言は神と共にあり。言は世の光であつた」

と。あの「言」という訳は困つたね。

「太初に霊言あり、霊法あり」

と言つた方がいい。あの場合のヨハネが「ロゴス」と言つたときのその内容はもう何とでも訳せない。どの訳を持ってきたってまだはみ出てしまう。やつとそのことに気がついてるドイツの学者がいる。

「今までのヨーロッパ人のキリスト教の把握はダメだ」

と。ことにヨハネに対して非常に驚嘆している。でも、我々が始めから気がついてたことを今ごろになってヨーロッパ人は言っている。それに気がつかない連中は、

「もうキリスト教はよしにして禅宗をよろう」

なんて、禅がはやっているのはそのわけだ。禅だけではまだ決して本当に全的ではない。それではまだ半分だ。



● 生命的靈的真理

¹¹審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。

これはサタン。サタンが「さばかるる」ではなく、実は「さばかれたるに因りてなり」なんです。もうさばかれてしまった。さばかれていますけれども、サタンのやつにしばらくのところ一応、権力を与えているけれども。サタンの力の上にもうひとつ神の力がちゃんと働いていることが見えないかと。

¹²我なお汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんじら得耐えず。

まだたくさんあるんだけど、今言ったつてしょうがない。「ああそうでしょうか」くらいところで受けとつてくれないから、よしておこうと。

「それは聖霊がくれば、お前たちは私が言わなくても分かってくれるから、まあこのへんで止めておこう」

というわけだ、キリストは。よくわかるですよ、イエスのこの気持がね。ちつとも難しくない、この聖書というのは。

¹³然れど彼すなわち真理の御靈きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。

神の国の「アレテイヤ」「真理」は——真理といつても、道理といつてもいい——真理という、なにか客観的な認識の事態のようにすぐ思つて困りますけれども。科学的真理ばかり考えるものだから。生命の真理というものはそういうものじゃない。生命的靈的真理というものは、やはり対象化してはつかめない。その真理の中に自分が本当に取り入れられて、からだでもつてそれを体感し、そしてそこに生きざるをえないというような受けとり方になるときに初めてそれが真理なんです。どんなに自分がそれがいわゆる実現できなからうとも、実現せざるを得ないような、迫られてくる場所の事態、これが本当の真理だ。生ける真理、靈的真理。それが「真理の御靈」の「真理」なんです。ヨハネが言っている真理はそれなんです。パウロだって、ペテロだってみんなそうですよ。特にヨハネはそのことがよくわかつている。

かれ

即ち聖霊は、

己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、

およそ始めから聞いていることは語り、

かつ来らんとする事どもを

終末のことです。

汝らに示さん。¹⁴彼はわが栄光を顕さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。¹⁵すべて父の有ち給うものは我がものなり、此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云えるなり。



いつでもキリストは「我」なんて言ったって、「父」を抜いてキリストは決して「我」なんて言っているのではない。キリストが「我」と言うときには必ず「父」を受ける我なんです。我々が「我」と言うときには必ずキリストにおける我です。手放しの我ではない。

「我を見よ」

と言ったペテロやヨハネの我はキリストにおける「キリスト我」です。

「このキリスト我を見よ」

ということ。

「この神我を見よ」

というわけだな、キリストは。「この神なる我を見よ」と。神の我を見よと。神における主です。キリストは「神我」です。この神我を示すのであると。

●憂いは喜びに

16 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし』

この場合、キリストはもちろん再臨のことも語っている。再臨のことであると同時に、二重構造になって、再臨とまた聖霊のこと。聖霊が先ですけども。聖霊、それから再臨。再臨もう近いわけですね、世の終りが。けれども、その世の終りは実はちよつと来なかった。

17 爰に弟子たちのうち或者たがいに言う『暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし』と言い、かつ「父に往くによりて」と言い給えるは、如何なることぞ』18 復言う『この暫くとは如何なることぞ、我等その言い給うところを知らず』

「しばらく」というのはどういふのでしようねと。

19 イエスその問わんと思えるを知りて言い給う『なんじら「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言いしを尋ねあうか。

あいかわらず相対的現実のようなことを言っているなと。

20 誠にまことに汝らに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂う

べし、然れどその憂は喜びとならん。

泣き悲しむのはキリストが十字架にかかるからです。十字架の本当の内容がわからないからね。キリストが十字架にかけられてしまったら、

「ああこれでお終いだ。いよいよ先生も十字架にかかってしまった」

というわけだね、失望落胆。キリストの約束の言葉を本当に受けとつてないものだから。

「けれども、またしばらくしたらお前たちの憂いは喜びに変わる。それは私が甦るからだ」

と。復活して現れるから、その時には驚き怪しみそして喜ぶと。始めは驚いて「本当かな」なんて怪しむ。それから「いや、本当だった」なんて言つて喜ぶ。まず情けない話です。



21 おんな産まんとする時は憂^{うれい}あり、その期^きいたるに困りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生まれたる喜^{よろこび}悦によりてなり。

22 斯く汝らも今は憂あり、然れど我ふたたび汝らを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、

この場合の「汝らを見ん」とは復活のキリストです。再臨にはまだちよつと時間があるからお前たちに会うぞ。そしたら喜ぶと。

その喜^{よろこび}悦を奪う者なし。

けれども、復活のキリストを見て喜んだって、まだ実は本当の悦びではないんだよね。これはどうしたって、もの凄い光る玉がウワツと入って来なくては。聖霊が入って来なければ。聖霊が入ってきたら、これは本当の――まあ仏教的な言葉でいうと――本当の法悦に入る。この法悦を奪うものはない。

● 宇宙的なキリスト

聖霊の人となつて、くすぶっていたらおかしいですよ。何がどうなつても、微笑んでいような人になれるわけです。何かすぐ氣持を損ねてしまつて、なんだか妙なことになるってしょうがないね。いいよ、どうなつても。いつ死んだっていいさ。それだけの、そういう

「これを奪うものなし」

と。御霊は悦びの霊、歡喜の霊です。その歡喜は、この現実の世を見るときに、また生^{なま}の自分を見るときには、そこには望みはない。けれども、もうひとつ奥の世界は大肯定です。ゲーテなんていうやつはやつぱりその大肯定を持っていたね。

「あなた方はなにか辻褄があつた神さまを信ずるようだが、毛虫をつくつたり、ペストがあつたりするけれども、私の神さまはそういう神さまだ」

とゲーテは言つた。やつぱり、彼は大きいです。ペストがあつても、毛虫がいても結構だ。サタンもしばらくはよろしいと。サタンのやつにある作用をさせておいて、眠りそうな人間を呼び覚ましてやるんだくらいの氣持ですね。そこではつきり、福音的な表現の仕方はゲーテはしませんけれども、しかし、あるひとつの境地はちゃんと見ている人です。

今までヨーロッパ的思惟はそういう、一切を包摂して、これを変質変貌、創造的に変えていくような、宇宙的なキリストに氣がつかなかった。これは『宇宙的キリストの啓示としてのヨハネ福音書』という本です。そういう宇宙的なキリストです。

「カトリック教会やプロテスタント教会だけが、これが真理だなんて言つて、なに

か自分でいい氣になつていような、そんなのではないぞ」ということです。だから、およそ偽りでないもの、インチキでないものは全部包括してしまふ。インチキなやつは引っくり返してしまふ。そして、変質変貌させていく。これが本



当の救いですから。そういう宇宙的なキリスト。その霊。だから、聖霊はまた宇宙的な霊ですから。宇宙をも支配するような、そういう霊をこの胸三寸の中に入っている。我々はこの大宇宙に対してはまるで原子みたいな小さな存在だけれども。粟粒にもなにもありません。しかし、その中にもそういう偉大な霊が入っている。パスカルが似たようなことを言っただけども。

「私たちの中に宇宙的な聖霊が入ってきた。この法悦、この喜びをいかなる他なるものをもつて代えることができるか」

と。惜しいね、青年諸君がただ政治問題だとか経済問題だとかそんなことを言って、妙に囚われてしまって――まあそれでもいいけれども――そんなことよりももうひとつ大きな世界に入ってからゆつくりやつてください。世界は引っくり返たって大丈夫だよ。どうか、皆さんはそういうもの凄い存在に、この福音を受けとれば、なってくださいよね。

●信即現

だから、

「この喜びを奪うものなし」

と。はいそうですかと。こういうキリストの言葉にぶつかったら、もう居ても立つてもいられない。この喜びを奪うものなし。この聖霊という驚くべき霊が、キリストという、キリストに宿り、キリストそのもののような霊が私たちに入ってきたら。

²³ かの日には汝ら何事をも我に問うまじ。

もうその時は、この聖霊が入ってきたら、私たちに向かつては、

「お前たちは何も聞かなくなつて、聖書を読めばスラスラわかつてしまうよ。わか
らなければ、どうかしているよ」

と言うんだ、キリストは。聖霊が入ってきたら、もうスーッと読めてしまう。それは本当にそうです。文字の奥の文字を読んでしまうからね。

誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて
賜^{たま}うべし。

はい。こここのところに「名」が出てきた。御霊の世界に入ると、この御霊を宿すとなると、
聖名を呼ぶ。

「主よ、キリストよ」

と一言呼ぶことが、直ちに聖霊の豊かなる内住ともなり、そして、それにおいて祈られることは、地球の向こう側のことであらうと何であらうと、もう電波よりか速いです、この霊波の方が。グッとその人に作用する。これはサンダーシングもそのことを言っている。本当にキリストの内住において祈られることは、そこにももの凄い霊的な力がきてますから。ですから、そこにおいて祈られたことは必ず、自分が意識する以上に聞かれている。根源



現実で聞かれている。祈りの現実を現実とする。祈りは、

「であろう」「そうしてください」「どうなるでしょうか？」

なんてのは本当の祈りではない。「してください」ということがすぐ聞かれているという事態です。これがもう信即現、信即現の世界です。もうそこに来なかったら、信仰なんていつたって、五十歩百歩です。それが今、相対的現実で現象しようがしまいが、そんなことはいいいですよ。どうせ、相対的現実なんてものはいろんな妨害物によつて妨げられている世界なんだから。その奥の世界から引っくり返していく。

私たちの中に霊界の核が結ばれているから、

「死んでも死なないよ」

とキリストが言われる。水素爆弾が爆発したつて一向に差し替えない、というような生命の世界。もうこれが使徒的次元です。完全に使徒的次元。なぜ、内村鑑三先生もそこまではつきり言わなかったか。とにかく、先生は

「自分で体験しないことは言わない」

と言うから、それは仕方がない。けれども、先生はある時に瞬間的には体験しているんです。

●勝利的な戦闘

²⁴ なんじら今までは何を我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、

「求めよ。御霊の世界で求められていることは、全部そこで与えられるぞ」

というわけです。「与えられるであろう」ではない。ギリシア語訳がどう言おうが、もともとこれはアラミ語だからね、キリストの言葉は。アラミ語というのは、ギリシア語みたいに細かいテンス(時称)は持っていない。それを細かく分析して訳してしまったから。新約聖書を原典だなんていうけれども――相対的な歴史的な意味においては原典ですけれども――この原典の奥に、形をなさざるところの原典的場があつたんだよな。そういう形をなさざるところの原典的な資料がむしろ本当の根拠である。そこをつかまえていかななくてはいかんわけです。だから、むしろ本当はアラミ語の聖書を勉強したいけれども。

まあアラミ語なんて知らなくなつて、我々の御霊の現実ではこれが読めてしまう。

「求めよ、さらば与えられるぞ。尋ねよ、さらば見いだすぞ。門を叩け、さらば開かれるぞ」

と。そうですよ。

而して汝らの喜^{よろこび}みたさるべし。

²⁵ 我これらの事を譬^{たとえ}にて語りたりしが、また譬^{たとえ}にて語らず、明^あ白^わに父のこ
とを汝らに告ぐるとき来^{きた}らん。

聖霊によつてですよ。²⁶ その日には汝等わが名によりて求めん。我は汝らの



為に父に請うと言わず、²⁷ 父みずから汝らを愛し給えばなり。

非常にキリストは大胆な言い方をしている。「もうお父さんがみんなやつてくれるよ。しかし、願う時には私の名で願え」と。

これ汝等われを愛し、また我の父より出で来りしことを信じたるに因る。

²⁸ われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり』

「しかしてまた汝らのうちに助け主として入っていくぞ」と。

²⁹ 弟子たち言う『視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいい給わず。³⁰ 我ら今なんじの知り給わぬ所なく、また人の汝に問うを待ち給わぬことを知る。之

によりて汝の神より出できたり給いしことを信ず』

よくわかりましたと。

³¹ イエス答え給う『なんじら今、信ずるか。

「今やつとわかったか。やつと受けとったかね」と。

視よ、なんじら散らされて各自おのが処にゆき、我をひとり遺すとき到らん、

「それは結構だ。とにかく、ひととお受けとつて、まあ結構だが、しかし、聖霊がくるまではまだダメなんだ。そして、みんな散ってしまつて、私ひとり遺すときが来るよ」

と。サブローナなんていうのは殉教の死をとげる時は、二人の弟子が

「私たちも一緒に殉教を受けて、三人で殉教にかかろう」

と。やつぱり聖霊の器です、みんな。

否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり。

³³ 此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。な

んじら世にありては患難あり、然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり』

自分は勝利者である。今は、「戦闘の教会」とか何とか言つて、また

「勝利の教会は最後の日だ」

なんて言つたけれども、実は戦闘であると同時に、それは勝利的な戦闘である。

「汝ら、雄々しかれ。我すでに世に勝てり」

「既に世に勝っているから、お前たちは決して負けないぞ」

と。サタンの支配しているところをヨハネ伝では「世」といいます。サタンの配下にあるところのものに対して勝利的である。聖霊がきてなければ、勝利ということはいいえない。

「自分の信仰が強いから勝利だ」

なんて、冗談言つてはいかん。

その助け主の聖霊の力、それは何ものにも負けない。パウロ、ヨハネ、ペテロがみな聖霊の人としてあと勝利したのはそのわけです。ステパノ自身がまず第一にそうであった。はっきりと聖名のために、否むものは否んでいかなくてはいかん。あるときは、やんわりと世



を受けるような立場のこともありましようけれども、しかし、一線を書さなければならぬときには、画さなくてはならないわけです。

それは示されるままに出てくるでしょう。この現世においては、それが割り切れない場合がなかなかあります。あつても、それを割り切れなければ問題が解決しないようなことでは、本当の現実を受けとっているというわけではないので、矛盾構造においてそいつを担っていく。それはごまかしでも何でもありません。かならずとして、その現実には力強い対処ができていくわけです。

●自然性と霊

ゲーテの『ファウスト』の第二部第一幕のところの4897から4902行の所をちよつと引用します。

「自然性（ナトゥア）と霊（ガイスト）、それはキリスト教徒に話してはいかん。そんなことを言つと、キリスト教徒は無神論者として火あぶりにするから氣をつける。なぜなら、そのような言い方をすのは極めて危険であるからである。自然性というものは罪である。霊というのは悪魔である。」

「実は私は本当にナトゥアとガイストというものを神の恵みの場および働きのところとして言いたいのだが、それがなかなかキリスト教徒には分かってくれない」というわけだな。

自然性と霊が自分たちの間に疑いという彼らの奇形児を生み出してしまつから、自然性と霊なんていうことをつつかりキリスト教徒に言つな

（本能と霊の力——それはキリスト教徒にむかつていふべき言葉ではない。そんな言葉が危険極まるものだから、無神論者は当然焚き殺されねばならぬのだ。本能は罪惡だし、霊は悪魔にほかならぬ。そして、その罪惡と悪魔のあいだから生まれたのが、懷疑とかたわものの混血児だ。そんなものは絶対にご免を蒙りましよう。」（大山定一訳）

という句ですが。けれども、ゲーテ自身がこの「ナトゥア」、自然というものを、人間の自然性を肯定しました。大自然ももちろん肯定している。それから、いい意味にける「ガイスト」、霊というものはもととみなこれは神の創造の中の大事なものだ。しかし、キリスト教徒はなんと狭い取り方をするかと。もちろん、「ガイスト」の最高なものは聖霊に相違ないんだけれども。なんてなこと、非常に大きく、

「もうひとつ大きな角度をキリスト教徒は持たなくてははいかん」というようなことを暗にほめかしたような句なんです。

我々の自然性はもちろん「ズンデ」（罪）です。これはそこにゲーテが言っているとおり。それから、「ガイスト」も、うっかりすると、「デーモン」（悪霊）が大いにあります。ゲーテの言葉というのは決して一面からは解釈しきれない。反面の真理をまた含んでいる。とにかく、非常に味のある言葉を使う。これはやっぱり大きな角度からの聖書の本当の見方のできている人でなければ、ゲーテの詩もなかなか読めないです。

